

(報告) 「学術と SDGs のネクストステップー社会とともに考えるためにー」
インパクト・レポート

1 報告内容

第 24 期には SDGs への取り組みを具体的に進めた結果、学会議の持てるリソースによって可能なこと、困難なことについてもある程度判断が可能になったため、それを踏まえて次期に次の課題を引き継ぎたい。

(1) 「SDGs を学会議がレビューする」という課題を学会議の個々の活動に落とし込む

SDGs についての議論は継続すべきだが、「SDGs を学会議がレビューする」「17 目標間のトレードオフを解消する」と大上段に構えると（学会議の活動面に現状では物理的制約があるため）取り組みにくくなる。諸委員会・分科会がそれぞれに行う活動の中で SDGs を意識する方が現実的である。とくに提言等の作成において、特定の研究分野の利害を優先するのではなく、対象となる課題について複数の意見があることを示し、SDGs の総合的達成を念頭に置くことが効果的と考えられる。提言の発出者が自ら、あるいは他の分野の研究者や市民との対話を通して、異なる意見を SDGs に関連づけながら考察するならば、その提言をトレードオフ・シナジー関係の分析のケーススタディとしても位置づけられるだろう。

(2) 「社会との共創によって SDGs 達成に貢献する」という観点から「新型コロナウイルス後の世界」を構想する

「新型コロナウイルス後の世界」が次期の分野横断的課題になると予想される。2019 年冬に始まった世界的パンデミックは、経済と環境、経済と生命・健康といった SDGs の目標間の競合がまさに重大な問題であることを、科学者だけでなく市民にも認識させた。したがって、この課題の検討は、学術のアウトリーチ以上に「社会との共創」に直結するシチズンサイエンスとして行うことにも適している。新型コロナウイルス感染拡大中に普及したオンライン会議システムなどを利用するならば、異なる地域の住民の意見、あるいはサイエンス・カフェなどの会場に行くことが困難な市民の意見を共有することができ、新たな効果が見込まれる。

2 報告の発出年月日

令和 2 年（2020 年）9 月 4 日

3 フォローアップ（提言を浸透させるための提言者側のシンポジウムや出版等の活動）

特になし

4 社会に対するインパクト

(1) 政策への反映

特になし

(2) 学協会・研究教育機関・市民社会等の反応

①学協会

- ・国際哲学人文学会議（CIPSH:The International Council for Philosophy and Human Sciences）にて藤原委員が基調講演（デンマーク オデンセ市にて、2021年12月15-16日）
“The Global History of Religions in the Era of the SDGs”
本報告の内容を紹介

②研究教育機関

- ・横浜市立大学 FD・SD（Faculty Development・Student Development）研修会「SDGsと大学、学術」にて小林副委員長が講演（2021年12月1日）
「社会課題と大学：変貌する学術の役割」
本報告内容の講演を依頼された

③市民

特になし

5 メディア

特になし

- 6 意思の表出内容において、他の異なる意見との関係性等に変化があれば記載してください。
特になし

7 考察と自己点検（（1）-（3）から一つ選択し、説明する）

- (1) 予想以上のインパクトがあった
- ② ほぼ予想通りのインパクトが得られた
- (3) 期待したインパクトは得られなかった

本報告の主たる「名宛人」は学術会議第25期の科学と社会委員会である。科学と社会委員会では、確かに本報告で示した課題が第25期の委員に引き継がれたが、任命拒否問題への対応を優先するという判断により、本格的な検討は先送りとなっている（「SDGs との関係については、落ち着いてから検討する」第一回委員会議事要旨より）。

その一方で、第24期の委員は、学術会議の個々の委員会・分科会でSDGsが話題に上る度に、この報告を示し、検討の成果を提供した。このため、科学と社会委員会の外の学術会議の会員・連携会員とは問題意識を共有することができ、議論の深化に貢献した。

さらに、国際発信という点では、国際哲学人文学会議（ISCに対応する人文学の組織）の理事会に合わせて開催されるアカデミック・プログラムで、藤原委員が人文学とSDGsの関係について学術会議内でどのような議論が行われたかを主要論点として含む

基調講演を行った。

国内では、本報告をインターネットから入手した横浜市立大学から、大学の SDGs に対する取組について FD/SD 講習会のための講演を依頼され、小林副委員長（前期）が協力した。

このように、第 25 期の科学と社会委員会に対する影響は、任命拒否問題という予期しなかった事態により限定的なものとなったが、学術会議外へのインパクトは当初の予想を超えるものであり、総合して(2)と判断した。

インパクト・レポート作成責任者
科学と社会委員会 委員長（第 24 期） 渡辺 美代子
委員（第 24 期） 藤原 聖子
提出日 令和 3 年（2021 年）12 月 6 日